



理事長
NPO 法人医療ガバナンス研究所
上 昌広



かみ・まさひろ。1968年兵庫県生まれ。東京大学医学部卒業、93年東京大学医学部附属病院内科研修医、95年都立駒込病院血液内科医員、99年東京大学大学院医学系研究科修了。虎の門病院血液内科医員、国立がんセンター中央病院薬物療法医員などを経て10年7月より東大医科学研究所特任教授。16年4月から現職。

地方病院に若手医師を集める法とは

「地方に若手医師を集めるには、どうすればいいでしょうか」と、よく質問される。私は、「医学論文を書く環境を整備することです」と答えることにしている。

私が重視するのは、症例報告と医学誌に掲載された原著論文に対するレターだ。基礎研究や臨床研究と異なり、どんな病院でもできる。目的は、インパクトファクターを稼いで、医学界で出世することではない。私が勧める理由は2つだ。まずは、文章にすることで、じっくりと考え、頭が整理されることだ。医師としての論理的な思考力を身につけることができる。外部に公開されるので、独りよがりな議論では掲載されない。これが、院内でのカンファランスや、地方会や学会での発表との違いだ。もう1つの理由は、英語で発表すれば、世界とつながることだ。予想もしない医師、研究者さらにビジネスマンからコラボレーションの話が来ることがある。

例えば東日本大震災後、福島で活動する坪倉正治医師の元には、彼の論文を読んだ米国RAND研究所の職員からアプローチがあった。彼らとの交流を通じ、米国では都市が小型核爆弾の攻撃を受けたとき、どう住民を避難させるか、あるいは避難させずにすむかが議論されていることを知った。米軍は災害医療の経験から、テロ・軍事対策に生かせる教訓を引き出そうとしている。異分野の専門家と交流することで、われわれは視野を広げることができる。「医者ムラ」に閉じこもり、同質の人と付き合うだけでは、視野狭窄になってしまう。

企業とのコラボは大学にいらなくてもできる。谷本哲也医師は、慢性胃炎に対する人工知能による診断の論文を共著者として発表した。これをきっかけに、遠隔画像診断に取り組むエムネス社（広島市）と共同研究を始めることになった。同社は将来的に人工知能を生かした遠隔診断を目指している。と

ころが、論文作成に熟達したスタッフがない。年間に30報以上の論文を発表する谷本医師のスキルを借りることにした。彼らは、論文発表を自らのブランドを高めるとともに、広告宣伝の一環と見なしている。

状況は病院も同じだ。論文を発表することは、病院にとってもメリットが大きい。論文を読むのは、若い真面目な医師が多いからだ。論文は、彼らに対する「広告宣伝」と考えることもできる。

若い医師に赴任してもらおうと思えば、まず自らの病院を認知してもらわなければならない。その際、医学誌に論文を発表しているのと、「医師不足で大変だから来てください」というのでは、相手に与える印象は全く違う。前者の場合、優秀でやる気のある若手医師が集まって来るが、後者の場合、紹介会社を経由して、何らかの問題を抱える医師がやってくることが多い。また問題を起こし、数カ月で辞めることもある。

東日本大震災以降、私は浜通りでの診療を続けている。この地域は、医師確保の点で明暗がはっきりと分かれている。医師が増えたのは、相馬中央病院、南相馬市立総合病院、ひらた中央病院、さらにときわ会常磐病院だ。このような病院の経営者たちは、論文作成に投資している。

この地域で、若手のリーダーとなったのが、前出の坪倉医師だ。毎週月曜日の夜、彼が特任副院長を務める相馬中央病院には、10人程度の若手医師や看護師が集まる。遠くいわきや仙台から駆け付けてくる若者もいる。全員が東北地方以外から、被災地に移った人たちだ。

彼らの活動を知り、今春、関西から3年目の医師が相馬にやってくる。若手医師を集めなければ、彼らが成長できる環境を整えることだ。へき地勤務の義務と強制を声高に叫ぶだけでは、問題は解決しない。